

# 文化の違う学校間交流からの学び —愛知教育大学とブラジル人学校との交流から—

川口 直巳

日本語教育講座

## Learning from Interactions between Schools from Different Cultures —Aichi University of Education and a Brazilian School—

Naomi KAWAGUCHI

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### 1. はじめに

2014年から東海地方にあるブラジル人学校の生徒と愛知教育大学の学生との交流を実施している。交流に参加した愛知教育大学の学生のほとんどが、外国人児童生徒支援リソースルームにボランティア登録をしており、外国人児童生徒の学習支援に携わっている学生であった。また、本学で筆者が担当する授業「外国語演習Ⅰ」の受講生でもあった。「ボランティア経験」と「大学での授業」、「ブラジル人学校との交流」というこの3つが互いに影響し合い、多文化共生に向けた非常に価値ある学びとなったと思われる。

本稿では、これまでのブラジル人学校との4回の交流から観察された学生の様子や感想から、学生達にどのような学びが得られているかを考察する。

### 2. ブラジル人学校の概要

ブラジル人学校とは、在日ブラジル人のための学校であり、本国ブラジルの教育課程に準拠した授業を実施しているため、授業はすべてポルトガル語で行われている。A校は、東海地方にある学校で、2000年に開校し、ブラジル政府教育省認可校である。2006年には全国のブラジル人学校の中で初めて「学校法人」として認められた学校で、幼児科、初等科、中等科、高等科からなる学校である。リーマンショックの時に生徒数が一時的に100人近く減少し、東日本大震災後に帰国したブラジル人もいたため、児童生徒数が減少した。しかし、近隣のブラジル人学校が経営難で閉鎖し、A校に児童生徒が流れたことにより、現在も約208人(2016年6月)が在籍している。ブラジル人学校の中では、かなり大きな学校である。教員数は14人である。

また、2010年から、1学期に1回高校生対象に、ブラジル本国の模擬試験ENEM (High School National Exam)<sup>(1)</sup>の実施をスタートさせ、大学進学に向けた教育に力を入れている。高校卒業後にブラジルに帰国した生徒が何人も有名国立大学に合格しているなどの進学実績もあり、A校は高い教育水準を目指している。ブラジルでも何度かA校のことが新聞などで取り上げられ、注目されているブラジル人学校である。

### 3. 交流の概要

ブラジル人学校A校との交流は、2014年に始まり、これまで合計4回の交流を行っている。

4回の交流のうち最初の2回は、2014年9月と2015年9月に行った。愛知教育大学の学生16人がA校を訪れ、各学年の授業を自由に見学させてもらった後、お昼休みにランチをとりながらA校のカフェテリアでブラジル人生徒や教員と交流するというものであった。引率者として筆者と外国人児童生徒支援リソースルームの研究補佐員4名が同行した。

3回目の交流は、2016年2月に行った。1回目と2回目の交流で行った授業見学とカフェテリアでの交流に加えて、愛知教育大学の学生による日本語の授業を実施した。

2016年5月に行った4回目の交流では、これまでの交流の形と異なり、A校の生徒28人と教員3人が愛知教育大学の大学祭に参加し、愛知教育大学の学生5人が案内役を務めるというものであった。

以上の4回の交流に参加した愛知教育大学の学生は、延べ31人である。

## 4. 交流の様子

### 4.1 第1、2回目交流

#### 4.1.1 第1、2回交流のスタイル

2014年9月と2015年9月に行われたブラジル人学校A校での交流では、愛知教育大学の学生16人が参加した(1回目:11人、2回目:5人)。午前中2時間の授業を自由に見学した。その後A校のカフェテリアでブラジル料理の昼食を取りながらA校の生徒や教員と交流するというスタイルだった。授業見学の2時間の間は、幼児科から高等科の教室を自由に出入りしてよいこととし、様々な学年のクラスを自由に見学することができた。

1回目の交流の時の授業見学では、9年生(中学3年生)のクラスで、お互いに自己紹介をし合う時間を担任の先生が設けてくださり、名前や趣味などを紹介し合ったり、お互いに質問をし合ったりすることができた。この時間によりA校の生徒と打ち解けることができたため、カフェテリアでの交流でも楽しく話をすることができたようだ。日本語が話せるA校の教員や日本の公立学校に在籍経験のある生徒が通訳を積極的にしてくれたため、言葉が通じないことが原因でコミュニケーションが取れないということにはなかったと思われる。

#### 4.1.2 交流に参加した学生の概要

第1回交流と第2回交流を合わせて16人の愛知教育大学の学生がブラジル人学校での交流に参加した。参加した学生のほとんどが、大学を通じて近隣の小中学校に在籍する外国にルーツを持つ子ども達の学習支援を行っている。また、「外国語演習Ⅰ」を受講した日本語教育コースの学生でもあり、この授業の時に、ブラジル人学校についての基礎的な事は説明をしてある。

第1回の交流では、1年生が4人、2年生が4人、3年生が3人、合計11人が参加した。第2回の交流では、1年生5人が参加した。

#### 4.1.3 交流に参加した学生の感想と交流の様子

第1回と第2回交流に参加した学生全員が生まれて初めてブラジル人学校を訪れたということもあり、ほとんどの学生が自分が通ってきた日本の学校との違いに注目した感想をあげていた。下記が日本の学校との違いという点に着目した主な感想である。

##### 感想1: 子ども達の様子

例) 子ども達がピアスや化粧をしていて驚いた。一人一人がとても個性的だった。自由な感じ。

##### 感想2: 学校内の様子

例) 学校内の掲示が日本の学校と全く違う、掲示物が凝っている。カラフル。学校内に売店があっ

て驚いた。

##### 感想3: 生徒達と先生の距離感

例) 先生がとても明るい。生徒に対して非常にフレンドリーで家族のようだ。日本の学校では先生と生徒が話さないようなことも話していて驚いた。

日本の学校との違いとして、やはり学生たちが最初に目についたのは、ブラジル人学校の子どもの自由な様子であった。服装は学校指定の体操服を着ているため全員同じであるが、ピアスをしたり、髪を染めていたり、女の子はメイクをしている子どもが多かったため、その様子に非常に驚いたようだ。また、髪の色やメイクの仕方も皆同じではなく、それぞれが個性的なことに驚いていた。第1回の交流日に文化祭練習をしていたクラスが多く、ダンスの練習も子ども達が主体になって行って、振り付けや衣装もすべて子ども達が考えると聞いて大変驚いていた。

また、学生達の目についたのは、学校内の掲示だった。確かに日本の掲示とは違い、カラフルな色画用紙などが多く使われている。子ども達の作品を掲示するというよりも、学校内を明るくするために掲示がされているという感じがうかがえた。

その他、生徒と教員の距離感が感想にあげられていた。8年生の教室での自己紹介の際に、教員があるカップルについて「最近付き合い始めたの。ずっと彼が片思いで…」というような話をしながら、生徒たちの紹介をした。このような様子からも、教員と生徒との距離感が日本の学校よりも非常に近いと感じたようだ。ブラジル人学校の教員の話によると、長い子は10年以上A校に在籍しているため、教員と家族のような関係になり、教員と生徒の距離感が近くなるのではないかという話だった。また、見学の時にA校の教員と生徒が日本にはない習慣であるハグをしている場面も何度か見かけたことも、教員と生徒の距離感が日本よりも近いと感じた要因なのかもしれない。

第1回のカフェテリアでのお昼ご飯を食べながらの



写真1 ブラジル人学校内の掲示①



写真2 ブラジル人学校内の掲示②

交流では、公立の学校に在籍経験のある子ども達が通訳をしてくれたり、ジェスチャーを使ったり絵を描くなどの工夫をして、お互いの学校などについて質問し合っていた。カフェテリアでの交流時間が短かったため十分な交流はできなかったが、非常に積極的な交流が行われていたように感じた。これに対し、第2回の交流では、第1回の交流に比べるとあまり積極的な交流が行われなかったように感じた。第2回交流に参加した学生数が5人と少なかったことや、参加学生が全員1年生ということもあったせいか、自分から積極的にブラジル人生徒や教師に話しかけるということはあまり見られず、引率した外国人児童生徒支援リソースルームのスタッフが話しかけるように促すような場面が何度も見られた。

## 4.2 第3回交流

### 4.2.1 第3回交流のスタイル

第3回の交流は、第1、2回と同じくA校で行われたが、これまでの交流スタイルとは大きく違う点がある。授業の見学は、前回と同じく見たいクラスに行き、見学時間中は教室の出入りを自由として1時間の授業見学を行った。授業見学の後、1時間の日本語の授業を愛知教育大学の日本語教育コースの学生3人が担当し、他の学生はその授業を見学した。

### 4.2.2 交流に参加した学生の概要

第3回の交流に参加した愛知教育大学の学生は、10人(4年生2人、3年生2人、2年生4人、1年生2人)である。そのうち日本語の授業を担当した学生は4年生の学生1人と3年生の学生2人の合計3人である。日本語の授業は9年生(中学3年生)のクラスで行われた。日本語のクラスは3クラスに分かれており、日本語が少し話せるBクラス(2人)と全く話せないCクラス(4人)で実施させてもらうことになった。Bクラスを学生1人で担当し、Cクラスは学生2人で担当した。教室は同じ教室内で行った。日本語の授業を担当しない

学生7人は、日本語の授業の見学と授業時間内の会話練習の相手役となった。今回の活動に参加した学生のうち、3人が第1回交流に参加した学生であった。

### 4.2.3 日本語の授業計画

日本語の授業を担当する学生3人は、事前に担当するクラスごとで準備を行い、授業計画を実施日の3日前までに報告に来てもらった。その際、あえて「こうしたほうがいい」「これはよくない」というようなことはできるだけ言わないように心掛けた。授業については、①「日本で日頃使えるような日本語の授業を実施すること」、②「見学者の学習者を会話練習などで使うこと」、この2点を伝えた。

少し日本語が話せる学習者2人のBクラスでは、「会話する時、文末を相手に合わせて使い分けができる」という授業目標を立てた。まず、お互いが初対面であるため、自己紹介を行い、その後で「ともだち」用の自己紹介のプリントを配布し、「何歳?」→「15歳。」「好きな食べ物は?」→「チョコレート。」のように普通体での会話練習を行った。次に「せんせい」と上に書かれたプリントを配布し、「好きな食べ物は何かですか?」→「チョコレートです。」というような「です・ます体」を使って会話練習をした。その後、見学者を「ともだち」と「せんせい」に割り振り、学習者と見学者が会話練習を行った。

ほとんど日本語が話せない学習者3人のCクラスの授業では、自己紹介と他己紹介の授業を計画した。まず、自己紹介では「私の名前は～です。」「好きな食べ物は～です。」「よろしくお願ひします。」という3つの文を導入した後で、顔の部位(目、鼻、口、耳、眉毛、髪)をホワイトボードに貼りながら確認し、「目が大きいです。」のように、「大きい」「小さい」「長い」「短い」などの形容詞を導入した。次に、インタビュープリントを配布し、授業見学している学生も含めて自己紹介をし合う活動を行った。最後に他己紹介として、似顔絵から外見の特徴を「目が大きいです。」のように言い、学習者に誰かを当てさせるゲームを行った。

### 4.2.4 交流に参加した学生の感想と交流の様子

今回日本語の授業を実施した学生のうち、Bクラスを担当した学生からは、下記のような感想があげられていた。

#### Bクラスの授業を担当した学生の感想

**感想1:** 楽しく活動できたと思うが、目標設定が簡単すぎたため、生徒達にとって新しい学びがあったかどうかという点では課題が残った。

**感想2:** 生徒の日本語能力や課題を見極めたうえで有意義な学習ができるといいと思う。

**感想3:** ブラジル人学校の生徒が、何人もの日本人(愛知教育大学の学生)とコミュニケーションをとる活動



ができたことは大変良かった。

このBクラスの授業を担当した学生は、第1回の交流に参加した学生であり、第1回の交流の後に一人でA校の日本語の授業見学に行っている。見学をしたことで、「実際に日本で使えるような会話練習をもっと取り入れた活動をしたほうがいい」というような意見を述べていた。今回の授業では、以前の見学を生かした授業内容となったと思われる。また、この学生からは授業実施後に、「A校の生徒が愛知教育大学に来て、たくさんの日本人大学生と交流する場を設定できたらいいと思う」という意見があり、この意見があったことから、第4回目交流（A校生徒の愛知教育大学学祭への参加）につなげることができた。

Cクラスを担当した学生2名からは、下記のような感想があげられていた。

#### Cクラスの授業を担当した学生の感想

感想1：生徒たちは楽しんでくれた様子だったが、生徒4人の日本語能力の差があり、一つの活動に時間がかかってしまった。

感想2：書くことができない生徒もいたので、文字学習も必要だと思った。

感想3：日本語の学習を押し付けるのではなく、楽しく学ぶことが大切であるため、教える側も楽しんで授業を行うことが大切だと思った。

このように、授業を担当した学生達からも、楽しく活動できたという感想に加えて自分達の授業の反省点があげられていた。

日本語の授業を見学者の学生からは、下記のような感想があげられていた。

#### 日本語の授業を見学した学生の感想

感想1：会話練習が楽しそうだった。自分も楽しく会話練習に参加できた。

感想2：A校の生徒が日本人の大学生と接する機会が持てたことは大変有意義だと思った。

感想3：日本社会で生活していても日本人と接する機会が少ないため、今回のような交流は大変いい。

見学者の学生の多くは、自分達の先輩による日本語の授業をA校の生徒がとても楽しそうに受けていたことに感心した様子がうかがわれた。自分達が会話練習に楽しく参加できたことが、もっとも多く感想にあげられていた。

A校の日本語の授業を受けたブラジル人生徒からは、下記のような感想があげられた。

#### 日本語の授業を受けたA校のブラジル人生徒の感想

感想1：授業のやり方がとてもよかった。

感想2：教材がよかった。

感想3：日本語でのコミュニケーションがとれて、本当によかった。

感想4：愛知教育大学の学生はみんなとても優しくかった。



写真3 愛教大の学生による授業の様子①



写真4 愛教大の学生による授業の様子②

これらの感想からもわかるように、愛知教育大学の学生による授業を大変楽しんでくれた様子で、今後もぜひ続けてほしいという希望があり、今年度の実施も予定している。できたら、今後継続した活動にしていきたいと考えている。

### 4.3 第4回交流

#### 4.3.1 第4回交流のスタイル

第4回の交流は、これまでの交流スタイルとは違って、ブラジル人学校A校の生徒が愛知教育大学の大学祭に来て交流を行うというものであった。大学祭のステージ参加に事前に申し込み、当日は低学年と高学年の2グループに分かれ、ステージでダンスを披露した。

また、今回引率したA校の教師に、ブラジル人学校や日本におけるブラジル人についての紹介を模造紙5枚にポルトガル語と日本語で作成してもらい、大学祭期間中の土日に、外国人児童生徒支援リソースルームが室内出店している展示室の一部にブラジル人学校の教科書とともに展示をした。

当日は、9時半にブラジル人学校に集合し、貸し切りバスで大学に向かい10時45分ごろに到着した。ステージ参加が12時頃からだったため、その前に少だけ学

祭を見て回った。ステージ参加した後すぐに弁当を食べ、15時まで約2時間大学祭を自由に見学した。その際には、愛教大の学生が案内役となった。

#### 4.3.2 交流に参加した学生の概要

A校からの参加者は、教員3人と生徒28人（高校1年生4人、9年生2人、8年生3人、7年生1人、6年生3人、5年生11人、4年生4人）である。学生28人は、ステージ参加に向けて1か月ほど前からダンスの練習を始めて、高学年の学生のダンスは、すべて自分たちで振り付けや衣装を考えたとのことだ。28人のうち2、3人が以前公立の学校に在籍していたため、日本語が少し話すことができた。

大学祭の案内役として、愛知教育大学の学生5人（1年生3人、3年生2人）と一緒に学園祭を回った。この5人のうち、1人は第1回と第3回の交流に参加した学生で、もう1人は第3回の交流に参加した学生だった。

#### 4.3.3 交流に参加した学生の感想と交流の様子

今回学祭に参加したA校の教員と生徒からは、下記のような感想があげられていた。

##### 大学祭に参加したA校教員の感想

感想1：初めての日本の大学の学園祭に参加することができて楽しかった。

感想2：大学生はとても盛り上がっていて、楽しそうで、一生懸命さが伝わってきた。

感想3：何もかもきちんとしていて、整っていて、さすがだと思った。

感想4：大学生と大学関係者の努力がわかる素敵な大学祭だった。

感想5：外国人児童生徒支援リソースルームの展示室はすごいと思った。

感想6：展示室にブラジル人学校のコーナーを作ってくださってうれしかった。

感想7：初めて会った方もみんなが快く接してくれるのが嬉しかった。

感想8：日本語があまり分からない私達にみんなが丁寧に接してくれた。

感想9：子どもたちも学校外でこのような体験はほとんどできないので、勉強になった。

##### 学園祭に参加したA校生徒の感想

感想1：とても楽しかった。面白かった。

感想2：大学の雰囲気がとてもよかった。

感想3：テントもにぎやかで美味しそうなものがたくさんあった。

感想4：いろいろなものが売っていて、見るのが楽しかった。

感想5：ステージは緊張したけれど、あとで日本人の方に褒めていただいて嬉しかった。

感想6：一緒に回ってくれた先生や大学生は優しく話

しかけてくれて嬉しかった。

感想7：案内してくれた大学生はとても親切だった。

感想8：ステージも見たかったけれど、他も回らなかったし、もっと長い時間いたかった。

感想9：私には難しいけれど、大きくなったら日本の大学に行きたいと思った。

感想10：またぜひ参加したい。

以上の感想からも分かるように、A校の教員や生徒



写真5 大学祭でダンスを踊るA校の生徒達



写真6 学祭を楽しむA校の生徒達①



写真7 学祭を楽しむA校の生徒達②



全員が日本の大学祭に初めて参加したということもあり、大学祭の雰囲気をととても楽しんでくれた様子が見て取れた。また、日本語があまり理解できなくても、日本人学生や教員が話しかけてくれることを嬉しく感じてくれていたことが分かる。また、時間が足りないと感じた生徒が多かったようで、帰りの集合時間の時に「まだいたい」と多くの生徒が訴えていた。

また、大学祭で案内役を務めた愛知教育大学の学生からは、下記のような感想があげられた。

#### 大学祭で案内役を務めた学生の感想

感想1：ブラジル人学校の生徒のダンスをもっとたくさんの方が見てくれるとよかった。

感想2：大学祭をもっと効率よく回すために、事前に無料でできるもののチェックをしておくとうよかった。

感想3：お金のかかるものが多く、お金がかかると聞くと、できないという子ども達が多くてかわいそうだった。

感想4：ブラジル人学校の生徒や先生が楽しそうに買い物をしたりしてよかった。

感想5：時間が短かったと思う。もっといたそうだった。

感想6：彼らの学校も見てみたいと思った。

感想7：ブラジル人生徒のダンスは、日本人にはまねできないリズム感のようなものがあり、かっこよかった。

感想8：ブラジル人学校についての展示をもっとたくさんの方に見てもらえるような工夫が必要である。

感想1でもあげられていたように、ブラジル人学校の生徒達によるダンスのステージの時間がちょうどお昼休みの前だったということもあり、あまり見学者がいなかった。案内役を務めた学生達は、せっかく一生懸命に練習してきたダンスを多くの日本人に見てもらいたかったと感じたようだ。また、感想8でも述べられているように、展示室に来る人があまりいなかっ



写真8 大学祭に参加したA校の教員、生徒達と愛知教育大学の学生達

たことから、多くの日本人にブラジル人学校について知ってほしいという気持ちが芽生えたようである。

また、大学祭の案内役を務めた学生のうち、1年生の3人は、初めての交流ということもあり、最初はどのようにいいかわからない様子だったが、慣れてくると、簡単な日本語を使ったりして交流することができた。学生の感想や解散後の会話から、「こうすればよかった」というものが多く、自ら交流の反省をしていることが観察された。

## 5. 考察

### 5.1 日本語の授業を通して得られた気づき

第3回目の交流では、愛知教育大学の日本語教育コースの学生がA校の生徒に日本語の授業を実施した。授業の中で、教師となった学生が「あなたの名前は何ですか」という日本語を使っていた。また、A校の生徒に指示を出す時に「立ってください」、「見てください」と言わずに、「立ちます」、「見ます」と言っていた。先に述べたように、授業を担当する学生には事前に、①「日本で日頃使えるような日本語の授業を実施すること」、②「見学者の学習者を会話練習などで使うこと」、この2点を伝えた。「あなたの名前は何ですか」というように相手に「あなた」という二人称を使うことは日常生活の中ではめったにない。「あなた」という二人称を使うことによって、相手対して横柄なマイナスのイメージを与える場合もある。このような理由から、「あなたの名前は何ですか」という文は①「日本で日頃使えるような日本語」とはいい難い。「立ちます」「見ます」という指示の仕方も日常使われている日本語とはいい難い。このような授業を行った原因を推測してみると、やはり日本語の教科書の影響があると思われる。多くの文法積み上げ式の教科書では、「あなた」という言葉が頻繁に使われている。また、日本語の教科書では、「立ちます」、「見ます」のような日本語教育で「ます形」と呼ばれている表現は、「立ってください」、「見てください」というような文で使われる日本語教育で「て形」と呼ばれている形よりも先に取り上げられている。そのため、日本語がほとんど話せないクラスを担当した学生は、できるだけ教科書の始めのほうに出てくる文法項目を使った「立ちます」、「見ます」を「立ってください」、「見てください」の代わりに使用したと推測できる。授業を担当した学生に理由を聞いたところ、「ます形」のほうが分かりやすいと思ってこのような表現を使ったとのことだった。「わかりやすい」というのは、教科書に出てくる文法項目の順番からの判断であり、必ずしも教科書の始めのほうに取り上げられる文法項目を使うことが「わかりやすい」につながるとは限らない。自分達が使用したこのような文が、「日頃使えるような日本語」からかけ離

れていることに指摘されるまで気が付かなかった。授業を担当した学生は、日本語がほとんど話せないクラスで何をやったらいいかとかなり悩んでいた。ほとんど日本語が話せないというA校の生徒への日本語の授業を日本語の教科書で取り上げられている文法からしか考えることができなかつたために、このような不自然な日本語を使つての授業になった。この不自然な日本語に気が付いた学生は、見学者の中にも一人もいなかった。会話練習に参加した際も授業担当者と同じく「あなたの名前は何か」という文を使用していた。授業を担当した学生と授業を見学した学生に、このような言い回しが「実際に使われているか」、もしくは「自分が日常生活の中で使用するか」と質問したところ、全員が「使われていない」、「(自分も)使わない」と答え、やっと自分たちが使っていた不自然な日本語に気が付くことができた。このような状況を目の当たりにしたことで、筆者自身大学での日本語教育を考えるよい機会となった。日本語教育の教員として、筆者も大学の授業の中で教科書の日本語の不自然さについて何度も繰り返し述べてきたつもりであった。また他の教員も同じだと思われる。にもかかわらず、こうした授業を学生が実施したということは、やはり十分に伝えきれていなかったのか、または日本語の教科書から離れて授業を組み立てることが学生にとっていかに難しいかということである。今回の交流での日本語の授業から、大学で日本語教育に携わっている筆者にこのような大きな気づきが得られ、それは学生の気づきを促すことにもつながった。今後の大学での授業において、教員側が見直していかなければならない重要な課題を明らかにできた。今回の交流においての気づきが多面的な改善につながるものと確信できる。

## 5.2 授業と交流を結びつけた異文化間教育の意義

今回の交流会に参加した愛知教育大学の学生のほとんどが「外国語演習Ⅰ」の受講生だった。「外国語演習Ⅰ」では、いくつかの海外の実践研究からバイリンガル教育の有効性が述べられている英語論文を読んでいる。母語と第二言語を幼少期から使用した教育が子ども達の両言語の能力を伸ばすことにつながっているという内容である。この授業の中で、公立学校に在籍する多くの外国にルーツを持つ子ども達が、日本語での日常会話には問題がないのにどうして日本語での教科学習についていけないのか、母語と日本語が両方とも低いレベルになってしまうのはどうしてかという実際の問題を常に関連付けて考えさせている。ブラジル人学校A校には、公立学校に適応できなかつたり、高校に進学できなかつたから中学卒業後にブラジル人学校に転入するという子ども達も多く在籍している。このような話も「外国語演習Ⅰ」の授業の時にしているせい、A校への見学を呼びかけた際にも多くの学

生が参加を希望した。A校では、バイリンガル教育を行っているわけではないため、ポルトガル語しか話せない子ども達がほとんどであるが、約30人(2016年9月現在)の生徒が公立学校に在籍した経験があるという。A校では大学進学に力を入れているものの、高等科を卒業後も全員がブラジルに帰国して大学に進学できるわけではない。昨年度(2015年度)の卒業生20人のうち、12人がブラジルに帰国し、9人が大学に進学することができたが、残りの8人の生徒は日本で派遣会社を通じて工場などで仕事をしているという。今年(2016年度)の卒業生18人では、帰国して大学を目指す予定の生徒は5人しかいないという。第1回の交流の時に、公立の中学から高校進学ができなかつたからA校に転入したという女子生徒がいた。その生徒に愛知教育大学の学生が「日本の学校とブラジル人学校ではどちらが楽しいですか」という質問をしたところ、そのブラジル人生徒は笑顔で「ブラジル人学校!」と答えていた。その生徒は、「日本の学校はみんな同じじゃないといけなければ、ブラジル人学校は違っていてもいい、気にしなくていい。」というような話をしてくれた。交流に参加した学生の中には、将来教員を目指す学生もいる。公立学校に適応できなかつたり、高校に進学できなかつたというブラジル人生徒に実際に会い、交流できたことにより、授業で得た知識にとどまらず、自ら様々なことを考えさせられるきっかけとなったに違いない。実際に私達の身近で起こっていてもこれまで知ることができなかった問題を授業で知り、それを言語能力理論から理解し、さらに知識だけにとどめるのではなく、ブラジル人生徒との交流から自ら問題意識を高めることにつながったと考えられる。

山田(2016)によると、2004年に異文化間教育学会が行った「異文化間教育に関する授業についてのアンケート」を分析した結果、異文化間教育に関する授業の実際として、総合大学、人文社会系の大学では異文化交流の体験を多くの学生に義務化する大学が多く、短期留学あるいは短期海外研修というプログラムが組み込まれていることが共通しているという。将来教員となる学生の異文化間教育を教員養成大学として考えるなら、意識しなければ目が向けられることのない実際に存在する身近な問題をきちんと把握し、自らがそれについて考えることにつながる異文化間教育を決して見過ごしてはならないと思われる。

## 5.3 振り返りから今後の異文化間コミュニケーションに向けて

ブラジル人学校との4回の交流で学生達は、今回の交流を振り返り、いくつかの改善点を提案する姿勢が見られた。

例えば、A校での授業実施後、見学者に「自分が今

度日本語の授業をすることになったらどのような授業を考えるか」と聞いたところ、「実際の場面でどのような日本語が使われるかを観察してみたい」、「ブラジル人生徒達が日本社会の中で、どんな場面で日本語に困ることがあるのか調べたい」、「自分が病院でどんな日本語を話しているか今度意識してみる」などという意見が返ってきた。ただ、「日常で使える日本語」というだけではなく、その「日常で使われる日本語」がどんなものかを自ら調べてみたいという意識が観察された。

大学祭の時にA校の生徒達と一緒に学祭を回ったことで、彼らがどんなものに興味を示すのか、どんなことに喜んでもらえるのか、どんな問題があるのかを実際に自分の目で見ることができた。だからこそ、「大学祭をもっと効率よく回るために、事前に無料できるもののチェックをしておくとうよかった。」というような感想が出たと思われる。

久保田（2016）は、異文化間コミュニケーションを行う2者は必然的に非対称の関係にあるとし、使用する言語が一方にとっては母語で他方にとっては学習言語である場合、すでにそこで力関係のズレが生じていると述べている。そして、このような非対称の関係でありながらもそこでの差から互いに気づくことを契機として学ぶことができれば互いに成長することが可能であるとしている。今回のブラジル人学校A校との交流では、この非対称の関係からの差に学生達が気づき、学びがあったからこそ、次に向けて自らの改善点を明らかにできたと思われる。

## 6. 今後の交流に向けて

今回のブラジル人学校との4回の交流では、A校と複数回交流したからこそ、学生たちの振り返りを次に生かすことができたと思われる。また、「ボランティア経験」と「大学での授業」、「ブラジル人学校との交流」の3つが関連したことで、学びが深められたと推測できる。このような学びの場を大学として学生に提供することは、松尾・杉原（2016）が主張する「多文化共生社会の実現を目指して、差異とともに生きるための学びの経験をデザインすることを試み、その教育実践の改善を繰り返すカリキュラムマネジメントを進めていくこと」につながると考えられる。今後もこのような交流を続けていくことで、学生たちの学びにつなげていくことができればいいと考えている。

また、これまでの交流では、A校の子ども達への視点が十分ではなかったと思われる。今後A校の教員と連携していくことで、お互いに学びが得られる交流にしていきたいと考える。

## 注

- (1) ENEM (Exame Nacional do Ensino Medioハイスクール国家試験)は、ブラジルで高校教育を評価するもので、このテストの結果は標準大学入学認定試験として利用される。多くの私立、公立大学（全国で85以上の大学）はこのテストを第一次入試試験としている。2008年のENEMは、1,698の都市で600万人以上の受験者が受験し、ブラジルで最も重要な試験と言われている。

## 参考文献

- 久保田真弓「異文化コミュニケーション」『異文化間教育のつらえ直し』、明石書店、2016年、pp. 129-146  
 松尾知明・杉原由美「日本型多文化共生社会に向けた学びのデザイン ―カリキュラムマネジメントの視点から―」『異文化間教育44』、異文化間教育学会、2016年、pp. 82-97  
 山田礼子「高等教育における異文化間教育の実践」『異文化教育のフロンティア』、明石書店 2016年、pp. 149-164

## 謝 辞

本研究は科学研究費助成事業（基盤研究（C））課題番号26370605 研究課題「外国にルーツを持つ子ども達への就学前支援モデルの構築 ―各機関の連携に向けて―」（代表者 川口直巳）による研究成果の一部である。

（2016年9月23日受理）